

もとの世界に戻るには精液が必要です

～空理の森で天才師匠とヘタレ兄弟子に

挟まれる W 理力増幅 3P ～

黄昏の光が背中を押していた。森の中の小道は生い茂った草木に夕陽が阻まれて、日没が早い。

キョーコは道の行く先に指を差しながら、歩を進めた。指差すごとに、其処に白い小さな光が灯り、足許を照らす。

「……はあ、ああああ……………ッ！」

いよいよ黄昏が去り、指差す場所を樹木の枝のところまで高くしたとき、隣の男が本日最大の音量でもって溜息を吐き出した。男は体内の空気を吐き切ったところで、がっくりと肩を落とし、その場に立ち止まってしまった。

「ガイレウスさん、お家まであと少しですよ。お

疲れだとは思いますが、日も暮れたことですし、休憩は辿り着いてから……」

「行きたくないの……ッ」

見当違いのことを窘めてきた少女の言葉を遮って、ガイレウスは地面に鬱憤を叩きつけた。肩は更に落ち込み、膝まで折れてしまう。

「けれど……、師匠に検定の結果を報告しないと」

「それが嫌なんだってばぁ——」

苦虫を噛み潰したようなガイレウスを見て、キョーコは密かに微笑を浮かべた。まるきり駄々っ子で、弟の垓の小さい頃のような。ガイレウスは年上だが、なんだか愛らしく思える。

「……そんなにお嫌なら、私から報告しておきましょうか？ ガイレウスさんはお疲れで帰宅した

と言って」

キョーコは森の中に建つ師匠の家に居候しているが、ガイレウスは街に住居がある。日が落ちたことを理由に妹弟子に報告を託して帰宅しても、差し支えはないだろう。——しかし。

キョーコが師匠に報告をしているところを想像して、ガイレウスはブンブンと首を大きく横に揺らした。

「できない、できない……ッ、カッコ悪すぎる！」

「どうしてです？ 見事に三級道士に合格したじゃないですか」

ガイレウスは萎えていた肩と膝を奮い起こして、拳を握った。

「そうだけど……、キョーコは飛び級で二級道士

に認定されたじゃないかっ！それを君に伝言で報告させるなんて、兄弟子として恥ずかしいんだよ、もう……ツツ」

「私が飛び級したのは、要領がたまたま合致しただけで、理力は明らかにガイレウスさんが勝っていますよ」

諭す言葉に、ガイレウスは複雑そうに眉を上下させる。

「うう……、けど、ぜったい師匠におちよくられる……」

「そんなこと、ないです。合格おめでとう、よくやった、って褒めてくださいますよ！」

「……この状況でその言葉を貰っても、素直に喜べない……。言葉の外に『妹弟子は飛び級だったけどね！』って煽りが含まれてて、落ち込むわー」

キョーコはまた、こっそりと一笑を漏らした。
——男のプライド、というもののなのかな？

弟にもあった。ジタバタしている姿は微笑ましくも思えるけれど、本人は至って真剣なので尊重すべきだろう。

「もし落ち込んでも、同じだけ私が褒めますよ。
ガイレウスさんは本当に頑張りました！」

落ち込みの原因になるキョーコに褒められても傷が深まるだけでは——。ガイレウスは内心で呆れて苦笑を浮かべたが、彼女の優しさに首肯を返した。

「……ありがとう、キョーコ」

お礼の声に頷き返して、キョーコはにっこりと笑う。

「さあ、報告しにお家に急ぎましょう。もう少しですよ」

そう促して、キョーコは指を持ち上げ新たな灯りを点した。歩き出した背中に、ガイレウスが声をかける。

「——なあ、もう敬語なんて使わなくていいんだぞ？ あんたの方が格上の、二級道士さまだし……」

首だけ振り向いて、キョーコはすぐに正面に向き直った。夜陰にはっきり分かるほど、頭が否定の方向に大きく揺れる。

「ガイレウスさんは先輩だし年上だし、そんな失礼なこと致しません。私の世界には、年功序列という概念がありまして」

彼女がときどき持ち出す『自分の世界の言葉』に、
ガイレウスはいつものように苦笑いを浮かべた。
うーん、と唸りながら歩を早めてキョーコの隣ま
で行き着く。

「けど、親しいのに丁重すぎるのは却って失礼に
なる、ってこともあるぞ」

「ああ……、慇懃無礼、ってことですね……」

ガイレウスの言葉に、キョーコは少し首を捻って
悩んでみせた。ここが好機とばかりに、説得の声
が降ってくる。

「そう、そう！ インギンブレイ！ 名前もさ、呼
び捨ててでいいんだ。なんなら、ガイ、でもいいぞ！」

「それは……、弟の名前と同じ響きなので、ちょっ
と」

怯んだキョーコに、ガイレウスはすかさず言い募る。

「じゃあ、ガイレウス！ そう呼んでくれたら、嬉しい！」

「……嬉しい、ですか？ それなら、お言葉に甘えて」

「——呼んでみて？」

頬を紅潮させて勢い込んで催促してくるのを不思議に思いながら、キョーコは言われたとおりに名前を口にした。

「……ガイレウス」

「おう！」

出席確認のように元気に返事を返す姿が、なんだ

か可笑しかった。ガイレウスは満面に歓びを浮かべて、溜息を繰り返して辿ってきた小道を弾む調子で歩いていく。

「敬語もやめて、な？」

「それは、慣れるまでお時間をください」

「師匠の家に着くまで、敬語禁止でおしゃべりしよう。それで、慣れる！」

キョーコは小首を捻る。

「そんなにすぐには、難しいです」

「ムズカシクナイです！ 二級道士に認定されることよりはカンタンです！」

わざと敬語を使って煽ってくるガイレウスに首を竦めて、キョーコはひとつ頷いた。

「……じゃあ、頑張ってみよう、かな」

「うん、頑張ってみよう！」

それから長くもない師匠の家への道のりを、二人は会話を弾ませて辿って行った。今日の検定試験の内容を中心に、師匠の話題、街の様子、他愛のない暮らしのことまで、語らいは巡る。

敬語が出ないように気を回しながらも、キョーコにとって楽しい一時になった。

園寄京子が生まれ育った故郷を離れたのは、突然で不条理なものだった。キャバクラのバイトの帰り道、自宅のアパートに向かって深夜の路地を辿っていたところ、いつの間にか森の小道を歩いていたのだ。

ごく普通の真っ当に育った十八歳の日本人女性ならば、パニックになって泣き叫ぶか気を失うかしていたかも知れない。けれど、彼女にとっては理不尽な状況はあまりにもお馴染みで、平常心を保つことに努力はいらなかった。

鬱蒼とした夜の森は、月明りで青白く照らされていた。月光は自分が見知っているものより強く明るく感じる。月の模様も見慣れたウサギとは少し違って見えた。それならば、此処は日本では無いのかも知れない。

京子は青白い樹冠を見上げて、肩を落とした。

「……獣に襲われて死ぬのは、痛そうだなあ……」

月光の届かない真っ黒な草叢は、いかにも森の獣が潜んでいるふうに思えた。都会育ちで森になど行ったことがないので、イメージに過ぎないのだけれど。

熊に襲われて上半身のない遺体が発見されたというニュースを思い出し、自分に置き換えて陰鬱な気分が増していく。自らの行く末を想像して、唯一の気懸かりが心に浮かんた。

「家に帰れなかったら、垓……、どうなるかな」

二歳年下の垓は、京子のただ一人の家族だ。高校三年生になったばかりで、大事な時期なのに——

家庭環境に恵まれなかった京子は、中学生から弟と共に養護施設で育った。

両親は揃って博打好きで、一億円、一兆円、そのまた上の位、一京円までも手に入れられるようにと、京子の名前をつけたという。一京円といえば、日本の国家予算の約九十年分なので、どれほどの拝金主義なのか解ろうというものだ。

願いが叶わない当て擦りなのか、二年後に生まれた弟にまた一つ上の位の『垓』と名付けたのが笑えない。

執心するほど両親はお金に愛されることはなく、京子の家は常に貧しかった。小学校を卒業する頃に父が家を出て行き、母子家庭はいよいよ困窮を極めた。

中学生になった夏、ついに母まで帰って来なくなった。給食と周囲の心配りで食いつないで一カ月、夏休みに入り給食にありつけなくなるので途方に暮れた。見かねた誰かの通報で養護施設から

迎えが来て、弟と二人で入所することになったのだ。それから母とは一度も会っていない。真実、二人は捨て子となった。

京子は勉学に励み中学校を卒業し、奨学生の権利を得て返済不要の奨学金で高校も卒業した。新たに奨学金の申し込みをして大学進学を薦められたが、弟を思ってこれを辞退して就職を決めた。

高校と大学では借り受ける金額が違い、審査や試験も厳しい。自分より成績の劣る弟では、審査の易しい貸与型の奨学金が精一杯かもしれない。それならば弟を大学にやり、自分が稼いだ給与で援助ができれば、と思ったのだ。

就職してから京子は給与の殆どを貯金し、週に三日キャバクラのバイトをこなして金策に励んでいた。

弟は予想どおり、昨年末の奨学生の審査に落ちて

しまった。素行は問題ないが、いささか学力が足りなかったのだ。四月に申し込みをした奨学金、返済金額が全額になるか一部になるか、そろそろ通知がくる頃だったのだが——。

「……咳、ごめんね」

弟が自分にとって唯一の家族であるように、弟にとっても京子が唯一の頼りなのだ。せめて就職するまで、助けて支えてあげたかったのに。このまま家に帰れなかったら、弟を見捨てることになる。父と母が、自分にしたように。

冷えた心持ちで京子は小道を宛てもなく歩き出した。とにかく、人家を探さなければ。人がいるのかどうかも、分からないけれど。

「縛 j o ? 縛₁縲₂難₃縛₄難₅ s 縛₁謬₂縛₃螂₄縛₅蟄₆舌」

とぼとぼと彷徨っていた京子の後ろから音吐が聞

こえたのは、一時間も経った頃だった。それは人の声には違いないが、まったく理解できない。京子が人生で巡り合った、どの外国語でもなかった。

振り向くと長身の男性が、知らない言葉を繰り返してくる。松明もランプも持っていないのに片手から白い灯りが発せられ、辺りを照らしていた。

「縋？ 難？ 滂シ湍險闡葉蛻縋_E縋九。縋湍縋医◎
縋荳蟄舌縋縋九」

「……あッ、あのっ、私、道に迷ってしまって、
助けてください……」

通じないと解っていたが、京子は駆け寄って必死に助けを乞うた。とにかく、自分が困っていることを伝えなければ。救いを求める声が伝わったのか、男は大らかに笑った。

/「縋縋医荳亥_o縋。縋_レ縋_フ噉縋_レ k 縋医_≥縋_レ励

縛る縛九縛峨」

その笑顔があまりに優しくかったので、京子はいからせていた肩を緩めた。次の瞬間、肩と背中に手を伸ばされ、抱き寄せられる。何事か、と声を上げる前に、京子の唇は男の其れで塞がれていた。

「……ん、んン……ツツ」

突然の辱めに逃れようと上半身を振じったが、両手ですっかり抱きしめられていて逃れることはできなかった。

——この可能性は、失念していたな。

京子はまったく警戒をしないで男に近付いた自分を呪い、後悔を胸の中に落とした。相手が性的に乱暴をしてくる可能性は充分に考えられたのに。

男の言葉から、少なくとも此処が日本ではないことは理解できた。ならば、治安も母国ほど良くは

ないだろう。治安の良いと言われていた母国でさえ、京子は養護施設の職員に無理矢理犯され処女を失ったのだから、警戒してしかるべきだったのに。

思い起こした過去の失態を苦々しく呑み下し、京子は力を抜いた。この手の乱暴者は、下手に抵抗を続けると暴力に走る。この段にきたら凌辱は免れないだろうが、なるべく痛い思いはしたくない。

怪我ならまだいいが、殺される可能性もある。自分の命にあまり価値を感じていない京子だったが、できれば辛くて痛い死は避けたかった。

「縋、縋。縋薙憶縛蟄舌◎縛」縛々縛」

京子が脱力したのを見とめて男は一瞬唇を離し、後ろ頭を撫でた。まるで小さい子供を褒めるような優しい手付きだ。予想外の行為に目をしばたたくと、再び呼吸が唇で奪われる。

「……ふう、ん、んんう……ん」

顎を掴まれ上に持ち上げられると、自然と京子の唇の合わせ目に隙間ができる。男の舌がその隙間からするりと侵入し、口内をまさぐり始めるまで、あっという間だった。

「ん、うふ……ツ、……っ」

抵抗する気は全くないが、あまりに艶めかしい舌先の動きに、京子の肩が反射的に揺れる。肉厚の舌を巧みに窄めて、時には広げて、男は京子の口内を刺激し、攪拌した。逃げ回っていた柔らかい舌を肉厚の舌で絡み取られ吸われた瞬間、京子の上半身が快感で激しく粟立った。

「……は、ふう……はあんッ！」

口付けは粟立つ反動で外れ、夜の森に喘ぎ声が笹

する。

「——はい、ごちそうさま」

急に聞きなれたフレーズが耳に届き、京子は顔を上げた。

「僕の言葉、解るかな……？」

「……は、はい……」

訊ねられて頷くと、男はにっこりとしか形容のしようがない笑顔で京子の肩を叩いた。

「あの、今のは……」

キスをした成果で会話が通じるようになったのか、と頭を過った予測の正否を確認しようと口を開いたが、言い出す前に男が言葉を被せてくる。

「君の理力を整えるために、僕と君の体液の混合が必要だったんだ。話ができないと不便だろうからね」

彼は京子の欲しかった答えを示してみせた。やはり、キスをしたから言葉が理解できるようになったのだ。強姦魔だと誤解したことを胸の中で詫びながら、京子は浅く首肯した。

「さて、さて。夜の森は危険だし、とりあえず僕の家に行こうか。すぐそこだよ」

「……あ、あの、私は……」

自分の状況を説明しようと声を上げた京子の手を流れるように握って、男は前に進み始めた。

「君は、いわゆる異世界からの迷子だろう？ 着ているものや話す言葉がこの辺りじゃ見ないものだから、すぐに解ったさ」

「は、はぁ……」

言わずとも状況を把握されていることに拍子抜けして、間の抜けた相槌を打ってしまった。

「だから、君が帰る家も頼る所も無いのは承知だ。僕の家は小さいけれど、灯りもご飯もベッドもあるよッ。——それとも、君は暗い森でお腹を空かせて野宿するのが幸せな世界の人かな？」

「いいえ……ッ、お腹すいてますっ、ベッドで寝たいです……っっ！」

退社して以降、お店でバイト中にノンアルコールカクテルとおつまみしか口にしていないし、働きづめで疲れているのできちんとした寝床が恋しかった。

弾かれるように発せられた声に、男は特有の笑み

を輝かせ、繋いだ手を強く引いた。

「僕はメルクルという好青年だ！ けっこう怪しい者だが悪い人間じゃない。歓迎するよ、可愛いお嬢さんッ」

ところどころ可笑しい言い回しに京子は小さく首を傾げた。

「……あ、あの、言葉が……、ところどころ、変……というか、分からない、というか……」

メルクルが、ああ、と呻く。

「僕の世界にあって君の世界にない言葉がある。逆もしかり、だ。だから知らない言葉があると、君に解るように勝手に翻訳されて聞こえるんだ。それで、かな？」

「……じゃあ、メルクルさんが怪しい者、ってい

うのは、誤訳なんですね」

京子が苦笑すると、メルクルは目を丸くした。

「んんん？ 誤ってなんかない、僕はけっこう怪しい者だと自己紹介したよ。僕ほど怪しい者は、この辺りにはいないからねッ！」

「え……、えええ……？」

意気揚々とした物言いに、京子とはぼけた感嘆を吐き出すことしかできなかった。

「さあ、今度は君の事を教えてくれないかっ！ まずはお名前を伺ってもよろしいかな？」

変わらない勢いの口調に気圧されて、京子は名乗りを上げる。メルクルの独特な雰囲気呑まれてか、口上はたいそう間抜けなものになってしまった。

「……園嵯京子、です。怪しい者ではありません」

「ソノザキキョーコ！ 面白い響きだねッ！」

メルクルは満足そうに破顔して、手を握り直した。

人は理力というものを持っている、とメルクルは言った。それは命ある生物は例外なく内包していて、生命活動の要でもある、と。

自然の中にも理力は存在する、と彼は教えてくれる。大気や大地、光や水や風や炎、樹木や草や石も理力を帯びているという。それらは、ただ漫然と垂れ流されるように発せられているものだが、自分の持つ理力と混合し、再構築して操作する技術を習得できれば、さまざまな事が為せるようになる。

理力によって生み出す事象には火を熾したり足を早めたりする他愛もないものもあるが、キョーコの故郷ではフィクションの中でしか見ない、魔法や超能力と呼ばれるような不可思議なものも含まれていた。

自身の理力を意のままに操り、混合と変革を為して新たな現象を生み出すのは、簡単な技術ではな

い。理力は誰でも持っているが、誰でも容易く操れるわけではないのだ。

理力を操る術を身に付けた者は尊崇を込めて道士と呼ばれ、国の定める検定もあるようだった。五級道士から始まり一級道士まである検定で、メルクルは能力においては検定基準を遥かに上回る特級道士と呼ばれる傑物だった。

その傑物が、目の前で技術を披露してくれる。メルクルが片手の掌を広げて水平に固めると、テーブルに置かれていたカップが触れてもいないのに持ち上がり、掌に着地した。

「……わあ……ッ、魔法みたい……！」

「魔法じゃないよっ、僕は悪魔じゃないから、魔力は持ち合わせてない」

その反論から、キョーコはこの世界には悪魔が存

在していて、魔力を使うという知見を得られた。

「……魔力は理力とは、どう違うんですか？」

「できることだけ見れば、大した違いはないんだけど、魔力の方が補助的な工夫で増幅しやすいってのはあるかな。人間の血や臓物を生贄にしたり、魔具を使って強くする、ってのは理力にはできないことだ」

キョーコは背筋に寒気を感じた。やはり此処でも悪魔は警戒すべきものらしい。できればお目にかかりたくない。

「理力を強くするには、ただただ修練を尽くすしかない。僕みたいにッ」

得意そうに胸に手を当てる男に少し笑って、キョーコは疑問を口にした。

「理力って、私にもあるんですか……？」

メルクルは笑って首を竦める。

「君が死人じゃなければ、ね」

「この世界の人間じゃないのに？」

「世界は関係ないさ。君のところじゃ理力の制御は探求されてないみたいだけど……。んー……。例えば、声をかけられていないのに、後ろに誰かいるのに気付くことはないかい？」

キョーコは口許に軽く拳を宛てて、考えを巡らせた。

「……気配？」

「そうそう、それ！ 気配は人から漏れ出た理力を、自分の理力で感じ取ったものんだ」

軽く頷いたキョーコを見てから、メルクルは言を継いだ。

「ここは空理の森と呼ばれるところでね。強い理力が混沌と溢れて飽和している、世にも貴重で特異な場所なんだ。その混沌の波や時折り起こる旋風に巻き込まれて、よく君みたいな迷子が落ちてくる森なのさっ」

「よく——？ よくあること、なんですか？」

メルクルは、あっはっはっ、と笑う。

「……まあ、五年に一人、いるかいなか、ってところかな」

「その人たちは……、もとの世界に帰れたのですか？」

キョーコの問い掛けに、男は笑顔の口許を引き締めた。

「——うん、ここからが本題だね」

メルクルの家に招かれ、人心地ついたところでキョーコは疑問を口にした。——もとの世界に帰れますか、と。

するとメルクルは、理力についての講義を始めたのだ。長くなるが事態を把握するのに必要な知識だから、と諭され、キョーコは素真に耳を傾けた。いよいよ、本題が示される。

「結論から言うと、帰れるよ」

「本当に……!？」

男の発した希望の言葉に、キョーコは歓びで色めきたった。自然に笑みが零れる。しかし、続いた

声に浮き立った気持ちは叩き落とされた。

「難しいけどね」

キョーコは肩を落とし、溜息をつく。

「……難しい、ですか」

「ああ、そうとう難しい」

簡単であるとは思ってはいなかったが、そうとう難しいと言われると気が滅入ってしまう。だが、垓を見捨てないためにも、可能ならば挑むしかないのだ。

「あの……、難しいって、どういう方面で？ すごくお金が掛かるとか、すごく時間が掛かるとか……、特別な資格がいる、とか……？」

「威うのはないね。でも、並大抵の努力じゃあ叶

わないと思うよ」

「努力……？」

メルクルは大きく頷いた。

「君が研鑽を重ねて理力の制御を身に付け、僕と同等の道士にならないといけないんだっ！ この稀代のッ、類まれなるッ、奇跡の天才道士メルクルと同等だよ！？ それはそれは、血の滲むような努力が必要になるだろう……ッッ」

くく……と、拳を握りしめて熱弁するメルクルに負けない音量で、キョーコは尋ねる。

「理力を操れるようになれば、帰れるんですね……!？」

「ああ、そうだよッ。何なら今すぐ君の家に行って、何か欲しいものを持ってきて証明して見せてもい

い。僕くらいになると、世界の行き来なんて自由自在さッ！」

メルクルの言葉に、キョーコは決意を固めた。もとの世界に戻るため、弟の助けになるため、努力を尽くすしかない。技術を学ぶ近道は、手練れに師事を仰ぐことだ。特級道士だという目の前の男はうってつけだろう。

「メルクルさん、お願いします。私を弟子にしてください。理力を制御する技術を教えてください……！」

キョーコはメルクルの正面に躍り出て居住まいを正し、深く深くお辞儀をした。見慣れない所作に面食らったメルクルだったが、僅かな間で意気を取り戻し、特有の笑顔で大きく頷いた。

「いいだろう……！ 君を立派な道士にしてあげるよ、キョーコ！」

そうして、メルクルの家に居候し鍛錬を積む日々が始まったのだった。

空理の家で暮らし始めた次の日、メルクルに弟子のガイレウスを紹介された。キョーコにとっては兄弟子になる。一年ほど前からメルクルに師事しているという三歳年上のその男は、いま四級道士なのだと笑った。

街に住居と仕事を持ち、二、三日ごとに森に通うガイレウスと共に、キョーコはメルクルの下で理力の修練に懸命に励んだ。三月に一度あるという道士の検定で一番下の五級道士に認定されることを取り敢えずの目標に掲げた。帰還を望む彼女にとっては此処での資格取得に意味はないが、能力の目安になるとメルクルが勧めたのだ。

研鑽を始めて二月、キョーコが頭角を顕した。

「——これは、びっくりだね」

師匠のメルクルは言葉どおりに驚嘆して、息を吐いた。修練で与えられた課題を、キョーコが及第点を大きく上回って達成させたのだ。

「近頃、ずいぶん力を付けてきたと思っていたけれど……、すごい上達ぶりだ」

「メルクル師匠のご指南が素晴らしいからですよ」

メルクルは胸を張って大きく笑う。

「それはそうだねっ！ 天才道士の僕の指南は、天才的にスバラシイ……ッ！」

彼はひとつ息継ぎをして、キョーコを見つめてくる。

「……けれど、それだけじゃないみたいだ。これ

は天賦の才だと思う。キョーコには、理力制御の才能があったんだね」

「それは……、ありがたい、ですね」

早く技術を極められれば、早く弟の元に帰ることができる。

「才能がある……、その上、君は真面目で努力家だ。弱音も吐かずに一生懸命に頑張ってる、その成果だよ。本当に、良い子だ……」

メルクルは柔らかく微笑み、キョーコの頭を優しく撫でた。慣れない扱いにキョーコは困惑して目を丸くするばかりだったが、触れられた所が妙に温かく感じられた。

「……この調子なら、思ったよりもずっと早く、もとの世界に帰れるようになるんじゃないかな。取り敢えず、二日後の五級道士の検定は楽勝だろ

うね」

妹弟子にあっという間に追いつかれて、ガイレウスが拗ねるだろう、と笑う師匠を横目に、キョーコは森に迷い込んだ時からの日数を改めて数え直した。

此処に来たのが日本の暦で五月の初め、二カ月過ぎて今は七月だ。可能ならば、垓が高校を卒業する前には戻りたかった。

「あの——、あと……半年で、帰れるようになる、でしょうか？」

弟子の問い掛けに、師匠はあっけらかんと答えた。

「そんなのは、分らないっ！ 君次第だからねっ」

予測でもいいから知りたかったのだが、まったく参考にならないメルクルの答えにキョーコは悄然

と項垂れた。明らかに落ち込んだ様子の弟子に、メルクルは首を傾げた。

「半年で、帰りたい理由があるのかな？」

キョーコは項垂れたまま頷く。

「……弟が、大事な時期で……」

うまく説明する言葉が見つからなかったので、キョーコはそう呟いた。メルクルには通じたようで、項垂れた背中を、ぽんぽん、と叩かれる。

「弟さんが、心配なんだね」

他人の口から聞くと、心配事が鮮明に突きつけられ、心を揺さ振られる。長いこと見ていない弟の顔を思い浮かべると、涙が滲んでくる。

「ああ……、泣かないで……ッ、可愛い顔が濡れ

るのを見るのは、僕も辛い……」

キョーコの涙に気がついたメルクルが大きな腕で抱きしめてくれる。いつの間にか手にしていたハンカチで、目許を拭われた。

沈黙を挟んでキョーコが呼吸を整えたのを確認してから、メルクルが腕を解いた。肩に手を置き、そのままキョーコの顔を覗き込んでくる。

「——ねえ、キョーコ。僕のこと、好きかな？」

「え……？」

思いもよらない問い掛けに、キョーコは絶句するししかかった。それに構わず、メルクルは答えを促してくる。

「大事なことなんだ。答えてくれる？」

この世界で、初めてあった人。生活の全てを見返りなしに与えてくれて、理力の修練を指導してくれる師匠。彼がいなかったら、早晩、野垂れ死んでいたかも知れない。好きか嫌いかの二択なら、迷う余地などなかった。

「……好き、です」

メルクルの顔面にある全ての部位がめきめきと持ち上がり、笑顔が作られるのがはっきりと解った。頬も熱く紅潮している。

「僕も、キョーコが大好きさッ！」

大声で宣言してから、いっそう音量を上げた掛け声で、さあ、とキョーコの肩が抱かれた。

「問題なく、裏技が使えるねっ！ これで理力の増幅を試みれば、半年に間に合うかもしれないッ」

「……裏技!? そんなものが……」

驚愕で瞳を全開にしたキョーコに、大きな首肯が返ってくる。目を瞠ったままのキョーコの肩をメルクルが押し出した。その先にあるのは、二階への階段だ。

メルクルの家は一階はダイニングとキッチン、二階に寝室の間取りになっている。部屋は三部屋あり、大きな主寝室をメルクルが使い、キョーコが一部屋借り、残りは空き部屋になっていた。

階段に向かいながら、上機嫌のメルクルが笑った。

「初めて会った時にも使ったじゃあないか、裏技！覚えてないかい？」

言われて、夜の森でメルクルに遭遇した時のことを思い起こす。理解できない言葉で話しかけられて、いきなりキスをされて――。

「あの、キス……!？」

正解だと言わんばかりに、メルクルが何度も首を縦に揺らして見せた。

「そうそう！ 自然を相手にした理力の操作や自分の理力の制御には使えないけれど、自分以外の生物に使える裏技なのさっ。自分の体液に理力を籠めて相手の体液と混ぜ合わせ、相手の理力を操作する。調和や増幅もできる便利技だ！」

そうやって理力を調和し、会話ができるようにしてくれたのか——。疑問を遅れて理解して、キョーコは改めてメルクルに感謝を述べた。

促されるまま、いつの間にか主寝室の扉の前に到達していた。今日はガイレウスが来ない日ではあるが、外に通じる戸口の近くでキスをしていたら急な来客があった場合に都合が悪いので移動した

のだろう。

「じゃあ、その……、これから、師匠とキスをして、理力の増幅を」

試みるのですか、と言い終える前に、メルクルの大きな声に阻まれた。

「キスじゃ足りない、セックスするのさっ！」

「え……」

予想外の言葉に、キョーコは硬直した。言葉を失った彼女を見て、メルクルは目をぱちぱちさせる。

「あれ？ 通じなかったのかな？ キョーコの世界じゃあ何て言うの？ 僕のおちんちんを君のおまんこに突っ込んで、精子を子宮に注入する生殖行為のことだけど……」

あまりに明け透けな言いように、キョーコは赤面して小さくなった。

「……わ、わかり、ます。セックスで、分かります……」

ああ良かった、とメルクルが頷く。

「僕たちはお互いが好きで、しかも男女っ！ 本当に良かったッ。男同士だったら、口とお尻でやるしかないけど、男女ならすんなり自然に気持ちよくもなれるしねッ！」

——お互いが、好き。

間違っただけではないが正確ではなかった。キョーコはメルクルを好きだと答えたが、男性として愛している、という意味ではなかったのだ。メルクルは、男女の恋愛のつもりで、お互いが好きだと言っているのだろうか。恋愛経験が乏しいキョーコには今ひとつ把握できていなかった。

だが、敢えて訂正はしないでおいた。どっちにしても理力増幅の為に、彼と情交しなければならないのは変わらない。行為の前にキョーコの気持ちを尋ねてきた彼の誠意を無碍にしたいはなかった。

暴行で処女を奪われ、その後も何度となく蹂躪されたキョーコにとって、愛のない性行為など慣れたものだ。一刻でも早く、垓のところに戻るためなら、躊躇うに値しない。

それからキョーコの鍛錬の行程に、メルクルとの情交という作業が加わった。主にガイレウスが参加しない日に行なわれるので、頻度は三日に一度、あるかないか。

それは修練を終えたあとに始まる。その日の成果が際立ったときには、ご褒美と称してメルクルの所作が深く甘くなった。師匠としての心遣いなの

だろうか、と不思議に思いながらも、それは心地よかった。

メルクルと身体を合わせることには何の苦痛もなく、次第に充足感すら感じるようになっていく。人肌の温もり、細心を籠めた触感、快感をともなう交わり、優しく守られる感覚——。それは今までの人生で、キョーコが味わったことのないものばかりだったのだ。

裏技の効果もあってか、キョーコの理力は飛躍的に高まっていった。五級道士の検定を受けに行って飛び級で四級道士の認定を得て、三カ月後の検定にはガイレウスと同時に三級道士に挑むまでになったのだ。